TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース
eyes107

松江泰治 マキエタCC

記憶は地に沁み、風を越え
日本の新進作家 vol.18

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2021 Vol.107

INTERVIEW

松江泰治 マキエタCC

MATSUE TAIJI: makietaCC

2F 2021.11.9|火| – 2022.1.23|日|

写真技法を駆使しながら、世界の様々な土地の表面を、赤裸々な光のもとに極度に平面的に写し取った作品で、時代の先端を疾走する写真家・松江泰治。2010年代後半から本格的に撮影をはじめた〈makieta（マキエタ）〉シリーズを軸に展開される展覧会「松江泰治 マキエタCC」について、松江初の作品論を2001年に執筆して以来松江作品を見続けてきた写真批評家・楠本亜紀にインタビューいただきました。

《PAR 32319》2008年 アマナコレクション／表紙：《TYO 90835》2021年 作家蔵

新作〈makieta〉について

── 今回の展覧会は、新作のマキエタ作品を中心に、これまでにも発表を重ねている都市を撮影したCC（注：City Codeの意）作品と一緒に構成する予定ですね。このマキエタというのはどういうシリーズですか。

松江 マキエタはポーランド語で「模型」という意味で、模型都市のシリーズです。模型にもいろいろありますが、建物の模型ではなく、建物が集合した都市としての都市模型。僕の作品はすべてがつながりを持っていて、マキエタも単独のシリーズではなく、都市を撮影したCCに付随する新しい展開なんだ。まるでCC作品のようなマキエタの光景を、CCと一緒に並べると面白いだろうと思っていた。

── マキエタの最初のはじまりは、南米エクアドルの首都キトで偶然出会った都市模型からだそうですね。

松江 僕は世界を旅して撮影するというのを基本コンセプトにしていて、2007年、エクアドルに出かけた。作品の大きなカテゴリーである、都市をとらえた〈CC〉と、自然をとらえた〈gazetteer（ギャゼティア）〉の撮影、他にも撮れるものは何でも撮ろうという姿勢で旅をする。そんなとき、偶然キトで都市模型に出会った。それがはじまりです。次は2009年、オリンピック招致のため、東京模型の展示があった。それらを撮影したのが二つの大きなきっかけです。

それから世界へ撮影に行く度に、少しずつマキエタを収集するようになった。前作〈LIM〉の発表後、2016年からは詳しい事前調査をして、集中的にマキエタを集めました。

今回の展示は、主要なマキエタ作品とCC作品を並置し、マキエタのバリエーション、地形マキエタや関連する動画などで構成しています。

光景としての模型写真

── キトも東京もかなり緻密にできた模型で、幸運な出会いでしたね。〈CC〉と〈gazetteer〉と同じ手法で撮影されると、すぐには模型だとはわからなくて、現実のようです。

松江 2009年、東京模型の作品を初めて展示したとき、「今度は空撮ですね」と言われました。その人はマキエタ作品を現実の空撮と思ったわけで、最初の発表としては成功です。しかし模型は撮影条件が悪いことが多く、なかなかいい写真が集まらない。まず都市らしい模型都市には滅多に出会えない。

建物が百戸ぐらい並ばないと、本当の都市のように見えないでしょ。僕が撮ろうとしているのは、模型というよりは都市の広がり。建物じゃなくて街並み。単独模型ではただの建築写真。都市や地形になっていないと風景に見えないというか、マキエタ作品にはならないんです。

しかも、僕の作品はいわゆる風景ではなく、地形や建物の集合体に真正面から光が当たっている状況を撮っている。野外ならば太陽が正面を照らす時刻に撮る。風景というより光景だな。

模型が収蔵されている博物館の中は、写真用の照明ではないし、暗くて、近くて、小さくて、ピントは全体に合いにくい。なかなか綺麗には写らない。現実の都市を写したCCと同じように、模型で端から端までピントをあわせるのはとても難しい作業だよ。

キトの模型では、裸電球の暗い照明で、ピント合わせも難しい。アオリと絞りで全面にピントを合わせて、数分間の長時間露光だった。露出時間を測りながら、こんなので写るのかなと、半信半疑で撮っていた。

── 松江作品に共通する、正面から、順光で、地平線を入れずに撮影するといった手法を採用すれば、どんな写真もそう見えてくるわけではなく、そもそもそれを成り立たせる前提がないと、ということですね。逆にそうした前提が成り立てば、模型も現実と等価なものとして立ち上がってくるとも言える。

松江 世界中で模型を撮るというのは、僕が世界を旅してCCを撮影するのとまったく同じことだからね。今回はそのCCに作り物も混じってました、というような（笑）。それは見る人に任せる。模型を現実に見間違えたとしても、まぎれもなくそれは松江作品にはまっただけで、どこにも嘘はない。模型も現実もカテゴリーはCC作品だ。

── 写真に写っているのが模型か現実かの判定に終わるのではなく、模型も現実と同じように風景を形成していることの驚きから出発すると、いろんな発見がありそうです。

バリエーションとユーモア

松江 模型も現実も同じものではあるんだが、模型には人が作ったなという、現実にはないほころびがあって、そこが模型らしくて面白い。ものすごく精巧に作られた東京の模型だって、地割れのような隙間があったりする。そういうのはユーモアを感じさせるよね。キトの模型もよくできているけれど、東京の模型と比べるとユーモラスに見える。世界中のいろいろな模型を集めて並置してみたい。どれも精巧に作ろうとしているのに、見比べると変なんだ。そこが大事なところで、似たものを集めて並置するよりも、ある程度の広がりをもったバリエーションをもつことが面白みにつながる。

《SYD 20119》2012年 東京都写真美術館蔵

── 煙突がいやに気になるマキエタがありました。無数に脅迫的に突き出ている……。

松江 これは19世紀末にスイスで作られた金属製の模型です。亜鉛と銅でできている。普通の模型は木や紙、野外模型ならば樹脂やセメントで作られることが多い。金属でできていると屋根の窓や、煙突の先端が、鋭くトゲトゲに感じる。

── だからなんですね、過剰さがあります。一方で左下に何かもこっとした意味不明な固まりがあるんですが。

松江 これは公園の木だよ。建物の精密さに比べて、雑に表現しているのが可笑しいね。模型にはそれぞれ個性があって、世界中の職人が独自の技術で作っているから、みんな違うんだ。共通の技法がない。ポンペイ遺跡の模型はコルクボードで作られている。彩色しなくても遺跡らしく見える。みんな一所懸命、技法を編み出して、克明に写し取ろうとしている、そうしたマニアックな行為は尊いよね。

《WAW 62222》2021年 作家蔵

── 素材が違うだけでなく、何を模型にするかでもいろんなバリエーションがある。松江さんの〈LIM〉シリーズにもつながる墓地の模型もありますね。

松江 これはノルマンディの戦没者の墓地だ。〈makieta〉であり、墓地シリーズ〈LIM〉であり、ノルマンディは都市ではないから〈gazetteer〉のカテゴリーになる。一般に墓地は都市機能の一部だから、模型都市の中にも墓地が作られていることがある。この写真をよく見ると全部が十字架ではないよね。

── 星型がある。

松江 ユダヤ教徒の墓が混ざっている。ヨーロッパの人にとって二回の大戦はものすごく大きなことなんだね。だから、そういうところまで精密に作りこんでいる。

記憶をとどめる―模型、写真、博物館

──「模型」と「写真」はある意味とても似てますね。現実を模したものということもありますが、記憶、記録をとどめる機能もある。さらに写真が発明された当時、植民地政策の一環で大判カメラを携えて土地を測量的にパノラマ写真などに収めて、写真を支配の道具のような形で使ったり。自分が住んでいる土地を模型にするという行為も、世界を一望の下に支配したいという写真的視線というか、欲望とつながっていますよね。

松江 古い時代の模型はそうした傾向が強いね。領主や権力者が作らせている。その土地の富や権力の象徴なんだ。今回一番古いものは1570年バイエルン公が作ったミュンヘン。あとで話すグアテマラの模型は1905年、大統領が作ったもの。さきほどの金属模型は博覧会の展示用で、近世の最後の姿を残している。ローマの模型は四世紀の様子だ。

最近に作られた模型にもそのようなメッセージ性があって、たとえばワルシャワの模型は1939年を再現している。これはドイツとソビエトに侵略される直前の姿だ。その都市の歴史上の一つの最盛期を模型として博物館に残すことがよくある。

また、博物館とは別に、模型のテーマパークも世界各地にあるね。一日で世界旅行ができるテーマパークや、鉄道模型など細密な室内の施設も人気だ。このような場所に戦没者墓地があったりする。

── 今回の展示にはマドリッドの地質学博物館の動画も入っていて、博物館というのも一つのポイントですね。

松江 最初に展示する動画にこれを選んだのは、博物館で展示を見る、という行為を象徴的に示したかった。動画の女の子が博物館で資料を見ているのと同じことを、写真美術館に来た人もしている。僕も世界の博物館で模型や資料を見ている。

日本では美術館と博物館を区別するが、本来はどちらも同じく博物館。さらに僕が実践している地理学というのは、博物学の基本です。いろいろな国、街へ実際に行く。それを克明に記録する。なるべくいろいろな国のものを集めて並置することに価値がある。並置によって違いが見えてくることで、さらに面白くなるから、10年も20年もかけて撮り貯めている。

── 松江さんはとにかく世界を回って収集したサンプルが豊富だから、意味や視点をずらしたバリアント作品の入れ方が絶妙です。彫刻の模型まであって、「似姿／写し」を作る行為って何なんだろうというところまで考えさせられる。

松江 フィレンツェのヴェッキオ宮殿。その前にあるミケランジェロのダビデ像はレプリカで右の彫刻は本物。それらを模型にしたら、全部がレプリカ。その模型を写真に撮ったら、ダビデ像は、レプリカの模型の写真コピーだ。ダビデ像もダビデの写しと考えると、とても深い入れ子構造だね。

デジタルの可能性としてのパノラマ写真

── マキエタは都市模型のほかに、自然の模型もあるんですね。

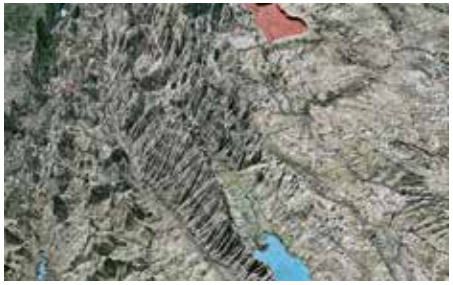
松江 僕の作品が、都市と自然、〈CC〉と〈gazetteer〉にカテゴライズされるように、〈makieta〉にも都市模型と地形模型がある。

今回出品する地形マキエタの代表がグアテマラのパノラマです。グアテマラの国土全体をカバーした巨大模型で一辺が30メートル、巨大すぎて一枚のフレームには収まりきらない。この全体像を超高解像度で、切れ目のない大きな一枚の写真に仕上げたい。そのためにデジタル技法はとても役立っている。

巨大な全体像を一点透視図の一枚の写真に紡ぎ上げる。これはラパスの都市パノラマにも応用されている。

── 以前はデジタルカメラで撮影したものよりもアナログの大判フィルムの方が解像度の点では優れているので、大判フィルムをスキャンしたデータを用いられてましたが、カメラもプリンターもデジタル技術で納得のいくものが出来るようになったということですか。

松江 理科少年は新しい技法をどんどん採用していくんだよ。デジタルカメラを手にしたらデジタルにしかできないことを技法に取り入れたい。その一例がこのパノラマ作品で、ここまでできたら、大判フィルムから次のステージに来たと思う。新しい技術によって、更なる高解像度や、ビューカメラを越えた投影法の写真が作れるようになった。デジタルを使うことで、大判フィルムからパノラマ作品へと進化したとも言える。



《Guatemala 1904》2021年 作家蔵

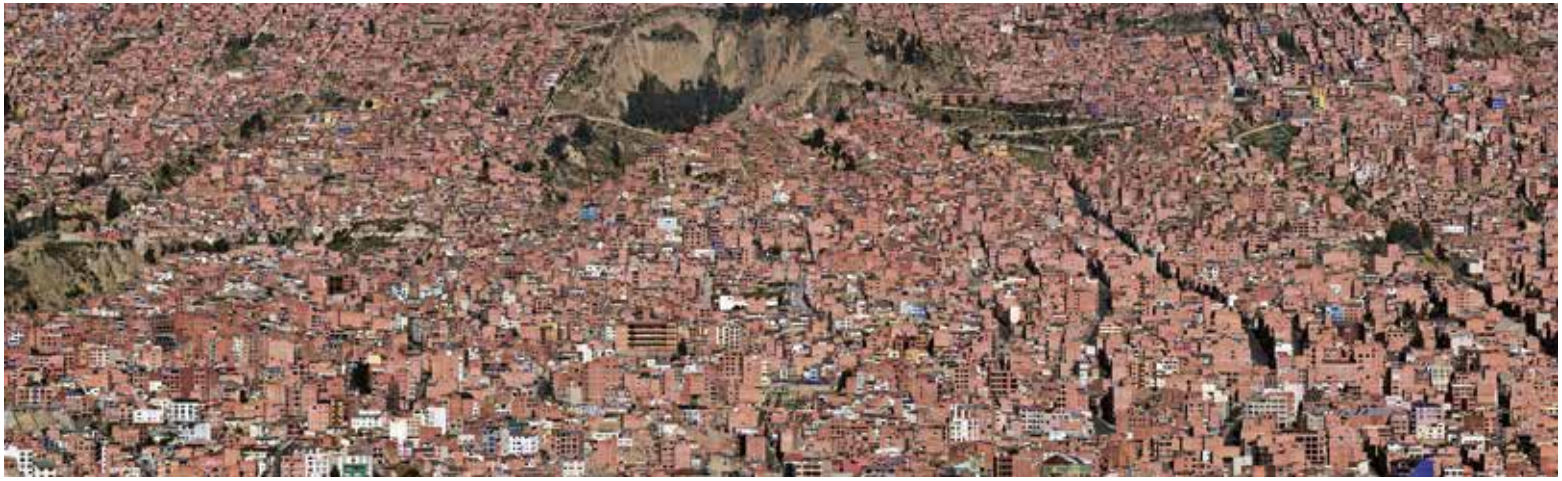
2010年、初めてのデジタルカメラ作品が動画だったように、従来の技法の枠組みを軽々と超える感じがいいよね。新作ではグアテマラの動画もあります。グアテマラの地形と、マヤ民族の日常が、パノラマと動画で立体的に見えるかな。

── 作品制作の手法とコンセプトが定まっていることで、そこがある種の実験場になっているとも言えますね。

松江 いろいろ取り入れると、さらに面白くなるよね。カメラで撮って写真を作る。時には動く写真もあるけれど、原則的な撮影手法は同じで、表現方法が増えていく。

全世界を均一にコピーして、僕の地名事典に項目を加え続けている感じかな。

聞き手・構成：楠本亜紀（写真批評）



《LPB 1733》2021年 作家蔵

図版はすべて©TAIJI MATSUE Courtesy of TARO NASU

松江泰治 マキエタCC

MATSUE TAIJI: makietaCC

2F 2021.11.9｜火｜ – 2022.1.23｜日｜

松江泰治（1963年、東京都生まれ）は世界各地の地表を独自の視点で写してきました。作家が撮影時に設けた、画面に地平線や空を含めない、被写体に影が生じない順光で撮影するといったルールは、写真の本質を問い直すような平面性を生み出しています。本展では、作家がこれまでに制作してきた作品の中から、〈CC〉と〈makieta〉という二つのシリーズを、初公開となる新作も交えて紹介します。

2001年から制作されている〈CC〉は、「シティー・コード」（City Code）を略したシリーズ名の通り、各作品のタイトルには撮影地の都市コードが付されています。ギリシャのアテネから撮影が始まったこのシリーズでは、作家が訪れた世界各地の都市の諸相が克明に写し出されています。画面全体にピントを合わせることで、奥行きが取り除かれ、画面上にあらゆるものが等しく存在しています。

一方、2007年から制作されている〈makieta〉の作品にも、都市コードや地名が付されています。

「makieta」（マキエタ）とはポーランド語で模型を意味し、実際の都市や自然を撮影した他の作品と同じルールで、世界各地の都市や地形の模型が写されています。エクアドル・キトの博物館に展示されていた模型を起点に、レンズを通して模型から立ち現れる風景には、現実と見紛うほどの精巧さがあり、その曖昧な境界は写真の本質を浮き彫りにします。

ミッドキャリアでの個展となる本展では、最新作を含む二つのシリーズを通して作家の現在地を示すとともに、その表現の可能性を探ります。

[観覧料] 一般 700円 ほか 各種割引あり
※1月2日（日）、3日（月）は無料。開館記念日のため1月21日（金）は無料
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

記憶は地に沁み、風を越え 日本の新進作家 vol.18

山元彩香
池田宏
瀬尾夏美＋小森はるか
潘逸舟
吉田志穂

Memories Penetrate the Ground and Permeate the Wind
Contemporary Japanese Photography vol.18

3F 2021.11.6|土|－2022.1.23|日|

東京都写真美術館では、写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘するため、新しい創造活動の展開の場として「日本の新進作家」展を2002年より開催しています。18回目となる「記憶は地に沁み、風を越え」展では、私たちの身体と土地、風景、そしてその記憶との関わり合いについて、多様なアプローチで追求する作家5組6名の写真・映像表現をご紹介します。

グローバル化とボーダレス化のあり方が変容し続ける社会にあっても、歴史、風習、伝承など、それぞれの地域や土地特有の記憶は様々な形で遺り続け、そこには多様な価値観が存在します。しかしながら一方で、私たちの想いは、ときに風のような軽快さをもってあらゆる境界を越え、他者と向き合う方法を見出してくれます。居続けることと移動とを繰り返してきた人類の歴史の中で、今、私たちはどのように土地・風景と対話し、他者とどのように関わることができるでしょうか？

デジタルとアナログのハイブリッドによって、風景・イメージの多層的なレイヤーを作り出す吉田志穂。自身のパフォーマンスによる映像を通して、風景と個人の関係を探る潘逸舟。自然災害とそこにある暮らしや伝承・語りを作品化する小森はるか＋瀬尾夏美。10年以上にわたりアイヌの人々を撮影し、民族という類型化に疑問を投げかける池田宏。馴染みのない地域で、言語を越えて、身体と無意識の関係性を追求する山元彩香。これらの作家たちによる表現は、私たちの生きる現在を考える上で、ひとつの手がかりを与えてくれるかもしれません。

山元彩香《Untitled #286, Mzimba, Malawi》〈We are Made of Grass, Soil, Trees, and Flowers〉より 2019年
©Yamamoto Ayaka, courtesy of Taka Ishii Gallery Photography / Film

山元彩香 Yamamoto Ayaka

1983年、兵庫県生まれ。2004年のサンフランシスコへの留学を機に写真の制作を始める。馴染みのない国や地域へ出かけ、そこで出会った少女たちを撮影することで、その身体に潜む土地の記憶と、身体というものの空虚さを写真にとどめようとする。東欧やアフリカの各地で撮影を行い、国内外で写真展やレジデンスに参加。2019年に出版された写真集『We are Made of Grass, Soil, and Trees』（T&M Projects、2018年）でさがみはら写真新人奨励賞を受賞。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※1月2日（日）、3日（月）は無料。開館記念日のため1月21日（金）は無料
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[助成] 芸術文化振興基金　[協賛] 東京都写真美術館支援会員　[協力] ソニーマーケティング株式会社

山元彩香
池田宏
瀬尾夏美＋小森はるか
潘逸舟
吉田志穂

池田宏 Ikeda Hiroshi

1981年、佐賀県生まれ。2008年から北海道に通い、アイヌの人々のポートレイトを撮影している。先住民族という括りでは語れない、そこで暮らす個人をとらえてきた。2019年に写真集『AINU』を刊行。2020年、日本写真協会賞新人賞を受賞。

池田宏《Coppe 千歳市 2015年9月》〈AINU〉より 2015年 ©Ikeda Hiroshi

潘逸舟《トウモロコシ畑を編む》2021年
©Han Ishu, courtesy of ANOMALY

潘逸舟 Han Ishu

1987年、上海生まれ。社会と個、他者と自己、風景という他者と自己との関係性を作品のテーマとして、映像、インスタレーション、写真、絵画など様々なメディアを用いて制作を行う。映像作品では、自らのパフォーマンス映像を多く制作している。2020 年、「日産アートアワード」グランプリ受賞。

吉田志穂 Yoshida Shiho

1992年、千葉県生まれ。インターネットでの画像検索によって被写体となる場所をリサーチし、実際にその場所に足を運び撮影するという、デジタルとアナログの間を往来する制作手法により、多層的な時空間が表現されている。

吉田志穂〈砂の下の鯨〉より 2016年
©Yoshida Shiho, courtesy of Yumiko Chiba Associates

小森はるか+瀬尾なつみ《山つなみ、雨間の語らい》2021年
©Komori Haruka + Seo Natsumi

小森はるか＋瀬尾夏美
Komori Haruka + Seo Natsumi

小森はるか（映像作家 / 1989年生まれ）と瀬尾夏美（アーティスト / 1988年生まれ）によるアートユニット。2012年から3年間、岩手県陸前高田市で暮らしながら制作を行う。2015年には陸前高田市から仙台に拠点を移し、一般社団法人NOOKを設立。各地で対話の場づくりを行いながら、風景と人々の言葉の記録を軸として作品制作をしている。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

写真新世紀展2021

The Exhibition of New Cosmos of Photography 2021

B1F 2021.10.16｜土｜– 11.14｜日｜

「写真新世紀」は、自由で独創的な写真表現を応援し、国内外で活躍する優秀な写真家を多数輩出するなど新人写真家登竜門として広く知られています。最後の公募となる今年度は2,191名の応募があり、審査員7名により優秀賞7名、佳作14名が選出されました。「写真新世紀展 2021」では、受賞作品をご紹介するほか、昨年度グランプリ受賞者・樋口誠也氏の新作個展「super smooth」を開催します。

樋口誠也《super smooth》2021年

〈お問い合わせ〉キヤノン株式会社　写真新世紀事務局 03-5482-3904
〈公式サイト〉global.canon/ja/newcosmos

［観覧料］無料　［主催］キヤノン株式会社　［共催］公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

プリピクテ　東京展「FIRE / 火」

PRIX PICTET: FIRE

B1F 2021.11.20｜土｜– 2022.1.23｜日｜

国際写真賞プリピクテは、緊迫した社会問題・環境問題に寄与する優れた写真家たちの作品を展示する、世界の最も権威ある写真賞の一つとして知られています。プリピクテは約18ヶ月のサイクルで毎回一つのテーマを設け、サステナビリティに関する議論や対話を引き出すことを目的としています。第9回目のテーマは「FIRE/火」です。本展では、2021年7月にアルル国際写真祭で発表された13名のショートリスト作家による作品を展示します。なお、受賞者の発表は、本展覧会期中の12月15日にイギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で開催される「FIRE/火」展のオープニングで行われます。

カーラ・リッピー《火》〈生贄〉より 2010年 ©Carla Rippey, Prix Pictet

展示作家　ジョアナ・ハッジトマス＆ハリール・ジョレイジュ、川内倫子、サリー・マン、クリスチャン・マークレー、ファブリス・モンテイロ、リサ・オッペンハイム、マク・レミッサ、カーラ・リッピー、マーク・ラウェーデル、ブレント・スタートン、デヴィッド・ウゾチュクゥ、横田大輔

［観覧料］無料
［主催］プリピクテ　［共催］公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

写真発祥地の原風景　はこだて（仮称）

3F 2022.3.2｜水｜– 5.8｜日｜

写真発祥地をとらえた初期写真を核に幕末・明治の姿を再構築する連続展の第二弾。幕末に至る国際都市としての「箱館」から、明治期の「函館」へと移り変わる中、写真渡来の地のひとつであり、日本写真史の礎を築く場でもあった「はこだて」は、いかなる歴史と文化を生み出したのか。近世から近代への飛躍、初期写真の醸成、地史と文化史の交差という視点から、初期写真および関連資料に基づく新たな切り口で「はこだて」を再構築する試みです。

ライムント・フォン・シュティルフリート《HAKODADI》明治5（1872）年 東京都写真美術館蔵

［観覧料］一般700円 ほか 各種割引あり
［主催］東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

TOPコレクション 光のメディア（仮称）

2F 2022.3.2｜水｜– 6.5｜日｜

写真は、「光」そのものを支持体（紙など）に定着させたメディアであるという特性から、これまで多くの芸術表現の手段として用いられ、作家たちは時には不可視のエネルギーさえも画像につなぎ止めようと試みました。本展では、当館コレクションを中心に、珠玉の名品を通じて、カメラを用いずに光をダイレクトに作品化する表現（カメラレス・フォトグラフィー）を含め、写真の特性を追求した多様でユニークな試みを紹介します。

ラースロー・モホイ=ナジ《無題》1922年 東京都写真美術館蔵

［観覧料］一般700円 ほか 各種割引あり
［主催］東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイト
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
(株)オンワードホールディングス
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛石油(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)サンライズ
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
JXTGホールディングス(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校／東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
(株)ダイケンビルサービス
台新國際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
電源開発(株)
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ドーム
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)Nana
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
(一社)日本写真文化協会
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
(株)ニューアートディフュージョン
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハースト婦人画報社
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)プリンスホテル
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
(株)ミルボン
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人

(令和3年9月末日時点・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。2022年のカレンダーやダイアリーがたくさん入荷いたしました！毎年人気のユニークな形の立体カレンダーは、デスクをにぎやかにしてくれるおすすめのアイテムです。

good morning calender 2022 Chairs (3個1セット) 2,420円(税込)
good morning calender 2022 Module 1,760円(税込)

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで) [TEL] 03-6447-7684
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

人気のフルーツたっぷりの「季節のパフェ」をはじめ、旬の野菜や果物をふんだんに使った食事やデザート、自家製のドリンクなど、素材にこだわったメニューをお楽しみいただけます。鑑賞後の休憩や待ちあわせなど、どうぞお気軽にお立ち寄りください。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定 休 日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2021 10			写真新世紀展2021 10.16(土)–11.14(日)	ポーランド映画祭2021 11.20(土)、21(日) 23(火・祝)、27(土)、28(日)
11	記憶は地に沁み、風を越え 日本の新進作家 vol.18 (企) 11.6(土)–2022.1.23(日)	松江泰治 マキエタCC (収) 11.9(火)–2022.1.23(日)	プリピクテ 東京展「FIRE/火」 11.20(土)–2022.1.23(日)	第1回 日本クロアチア映画祭 12.17(金)-12.19(日)
12				
2022 1				
2	第14回恵比寿映像祭 2.4(金)–2.20(日)			
3	写真発祥地の原風景 はこだて (収) 3.2(水)–5.8(日)	TOPコレクション 光のメディア (収) 3.2(水)–6.5(日)	APAアワード2022 2.26(土)–3.13(日) 本城直季 3.19(土)–5.15(日)	
4				
5				

(収) 収蔵展　(企) 企画展

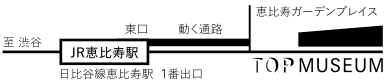
「ぐるっとパス 2021」詳細はこちら ▶

( )
恵比寿映像祭
Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions

第14回恵比寿映像祭　2022.2.4(金) – 2022.2.20(日)

2008年度から毎年開催されているアートと映像のフェスティバル。文化都市東京・恵比寿から発信する事業として、東京都写真美術館の全フロア、恵比寿ガーデンプレイスおよび地域に広がる文化施設と共に開催。映画、アニメーション、実験映像、ドキュメンタリー、現代美術ほか、多様なジャンルの映像芸術表現が一堂に揃います。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00（木・金は20:00まで）※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日（月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館）、年末年始（12/28～1/4、ただし1/2、1/3は臨時開館）

東京都写真美術館ニュース「アイズ2021」107号　□発行日：2021年11月6日／企画・編集：東京都写真美術館管理課企画広報係　□印刷・製本：株式会社公栄社　□発行：公益財団法人東京都歴史文化財団　東京都写真美術館©2021　□本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。